

# 伊勢・熊野・和歌山を訪ねて

## ——地域が生み出した秀逸のヒトとコト

一般社団法人 洸楓座  
一般社団法人 e f c o . j p  
代表理事 佐藤建吉

▼熊野大学と伊勢詣  
読者は、中上健次と南方熊楠をご存じだろうか。和歌山県出身で稀代の作家と呼ばれた中上健次の主宰で始まった「熊野大学」は、彼の死後25年となったが、生地の新宮市でなお継続している。

今年の熊野大学は、同じく和歌山県出身で偉大な博物学者であった南方熊楠を取り上げ、「南方熊楠と中上健次を探る」と題して、8月5日〜6日に合宿が行われた。

筆者は、これに参加するため、47年ぶりの熊野行きとなったが、伊勢神宮にも行くことにした。夜行バスで東京を立ち、雨模様の早朝、伊勢市に着いた。名物の伊勢うどんを食べ、伊勢神宮の外宮（豊受大神宮）に行く

と、老杉の境内は、雨霧の中で一層の神聖さが漂っていた。

正宮を詣でたが、「風宮」という名前に惹かれた。筆者は、風車開発を進めているからである。風宮は、小さな別宮であるが、交差して突き出した「千木」は、屋根と調和して無駄のない建築様式であると感じた。風宮は農耕の神であり風雨を司るといふ。

次にバスで内宮（皇大神宮）に移動すると、広い境内の正宮の手前で、今度は「風日祈宮」と出会った。神宮を訪ねると、元寇襲来の折に神風が吹いて国を護ったとの謂れから、別宮として祀られているという。

伊勢神宮は、外宮と内宮の両方を詣でるのがよいとのこと、今回はそれを実現できた。

▼熊野の地勢と影響  
熊野の地勢は独特である。大阪から海岸線で南に西回り、名古屋からも海岸線を南に東回り、また奈良からは吉野や高野山を超えて南下して辿り着く。秘境ともいえ、逃げ場のない海里・山里でもある。熊楠も、健次もそれに影響を受けたといえる。その地は自然と精神の対立と融合がある。それは、生命の進化の地でもある。まさに熊楠はそれを踏査し、発見と体系化を行った。健次は、熊野の文化と西洋文明との対立と融和を自身の切り口とした。

▼博物学者・熊楠  
南方熊楠（1867〜1941）は、和歌山市に生まれ、裕福な家に生まれ、地元の中学を卒業

し、上京し東京の大学予備門（現・東京大学）に入學したが、自らの関心に注力した。その後、アメリカとイギリスに滞在研究し、スケッチや模写が上手であり、秀逸な観察眼を研鑽した。

▼「たま電車」の  
熊楠の生家は和歌山市にあり、父・南方弥右衛門は明治17年（1884年）に南方酒造を興した

が、熊楠との関わりで、大隈重信の名づけで「世界一統」と改称された。紀州には、鉛水があり、酒造が多い。前報で、ローカル鉄道応援酒

「鐵の道」について記したが、この旅先でも新たな「鐵の道」の提案をさせて頂いた。新宮市の尾崎酒造、和歌山市の世界一統にもお願いした。後者では、和歌山電鐵の貴志川線が応援先である。

▼熱情家・健次  
中上健次（1946〜1992）は、複雑な家族関係を持つが、熊野を背景とした感受性を持ち、その情報発信を行った特異な作家（もの書き、活動家、評論家、今というソーシャルアントレプレナー）である。

健次は、熊楠の没後5年後に誕生している。二人の接触はないが、熊楠の影響を受けたといわれている。熊野に根を生やした熱情家でもあった。熊野大学は、その一つでもあった。

熊楠の影を受けたといわれている。熊野に根を生やした熱情家でもあった。熊野大学は、その一つでもあった。

熊楠の影を受けたといわれている。熊野に根を生やした熱情家でもあった。熊野大学は、その一つでもあった。

熊楠の影を受けたといわれている。熊野に根を生やした熱情家でもあった。熊野大学は、その一つでもあった。



「たま電車」の内部(上)と車内の文庫。熊楠と健次の本も配架されている



コンセプトとされており、OfByForの視点と共通している。

和歌山電鐵の6編成の車両のうち4編成は、「たま電車」、「おもちゃ電車」、「いちご電車」、「うめ星電車」という水戸岡ワールドとなっており、家族での外国人観光客も多い。「たま電車」の内装は、木製の大きな

チェアのようなデザインで、わくわく感が満ちている。

車内には、窓面を使っ大きな書棚がついており、日本語の本ばかりでなく、中国語・韓国語・英語などの本が本箱に載せられている。その書籍の購入や整理は、「貴志川線の未来をつくる会」が行っているとい

う。同会は「再び廃線の危機を迎えないために」の合言葉を掲げ活動している。

『鐵の道』は、売りに上げの一部を、その活動を支援するカタチで実現したいと考えている。この旅でも、地域には人材がおり、歴史と文化をつくることのできた。